

台湾輔仁カトリック大学臨床実習報告書

私は2017年5月6日～28日にかけて、交換留学生として台湾の輔仁大学と提携する3民間病院での実習を受講しました。この実習では日本と海外での実習の違いや輔仁大学の学生との交流等を行うことができました。

① 志望動機

動機としては以下の3点です。

- 1、自身の現状の英語能力を確認すること
- 2、自身の英語能力について訓練すること
- 3、海外での実習を通して多様な視点をもつこと

1、2に関しては佐賀大学では医療英語・5年次臨床実習での論文検索等で学習することは可能ではありますが、コミュニケーション・リスニングに関しては訓練する機会が少ないと思います。今回の実習を通して自己の英語能力を確認するとともに、後者の能力を訓練する機会として

3に関しては日本と台湾での医療の違いなどを見学させていただく機会として

② 第1週—新光吳火獅紀念醫院

新光吳火獅紀念醫院は台湾での企業集団新光グループの病院で創業者である吳火獅氏の名前が入っています。

ここでは私は循環器内科（心内）の見学をさせていただきました。残りの二人は小児科の見学を行っております。循環器内科では輔仁大学の学生と心電図（現地ではEKG）を学習し、患者さんについてのプレゼンを行いました。

前者についてはPGY（日本において卒後2，3年目に相当（研修医2年目・専門医1年目））から患者8人くらい指定され、学生自身がポータブル心電図で心電図を取りに行き自身で読解を行いそれについて別日に講義を受けるというものでした。日本では自分で取りに行くことはなかったので、台湾では実際にやらせるというのが方針の様です。また、指導は上の先生だけでなくPGYが積極的に教えているという状況に驚きました。

後者については2日目に発表を行いました。患者さんについてのプレゼンは、佐賀大学の産科婦人科の評価に近い形式で約1時間担当教員と議論するという形式でした。自分の担当患者さんは急性冠症候群（STEMI）・右心不全で既往歴として高血圧・糖尿病をもつ患者でした。日本と違う点はプレゼンの途中で多くの質問が入り、学生としては見落としや深く考えるきっかけを多く与えていただけるようなプレゼンでした。また、全

ての患者さんに入院病歴概要(Admission note)があり家族歴が図示され、同居・離婚までも記載されていること、Review of systemでは一般・皮膚・頭・目・耳・鼻・口・首・呼吸・胸・心血管・消化管・泌尿器・性器・内分泌・筋骨格系・血液・神経・精神の項目がありその中にさらにその項目における症状の有無が書いてありスクリーニングするようになっていた。日本では大学に来るまでにある程度鑑別がされているためこのように問診でスクリーニングを記載する必要がないこと、台湾では選定療養の制度がなくどの病院でも気軽に行ける点がこの違いの原因と思われます。

③ 第2週—天主教耕莘醫院

天主教耕莘醫院は輔仁大学と同じカトリック(天主教)の病院です。この病院では1人は神経、私を含む2人は総合内科を見学させていただきました。

この病院では佐賀大学の内科の臨床実習と同じように毎日輔仁大学の学生と患者さんのところに行きカルテを書くことや患者さんについてのプレゼンテーションを行いました。また、輔仁大学の学生さんによる実際の患者さんへのOSCEを見学させていただきました。

カルテにおいては日本と同じようにSOAPで書いていて、プレゼンにおいてもプレゼンをもとに各症例のミニレクチャーを行う点は日本と違いますが概ね変わらないと思います。

日本と違いがある点については以下2点です。

OSCEが約1か月に一回程度ありその振り返りがすぐに個人に行われている点、この病院だけではなく多くの病院で学生実習用の設備(学生が問診を取る部屋をマジックミラーで先生が除き、マイクで指示できる部屋が何か所もあったりなど)が備わっていて、実際の患者さんがそれに参加している点です。

後者においては輔仁大学自身に附属病院が現在なく、臨床実習を市中病院で行わなくてはならないこと、国民性として台湾の方がとても親切で学生参加の同意・協力が日本より得やすいなどの事情があると考えられます。

④ 第3週—國泰綜合醫院

國泰綜合病院は、Lin-Yuan Group (リン・エングループ)の子会社である國泰生命保険会社(Cathay Life Insurance Co.)によって開業された病院です。ここでは、心臓血管外科に私を含め2名、胸部外科に1名見学に行きました。

手術としては主にCABG、僧房弁置換を見学しました。手術・手技に関して日本と大きな違いがないと思います。あるとすれば、手術時間が日本より短いことがあげられると思います。また、この病院では分院があるため先生がオペ後すぐに別病院に行くことが多くあるようです。これは佐賀大学でも午前中外勤や外部病院での出刀などもあるので変わらないと思います。

⑤ 3 病院に共通する点、学生教育について、その他

台湾の病院は日本のように選定療養のような制度がなく、まず小さな病院にいてそこで対処しにくい疾患は大きな病院に行くといった形ではない為どの病院も患者さんが非常に多いです。(小田先生によると昔の日本の病院もそうだったようです。)また、研修医が足りていない為台湾の研修医は夜勤を週3回し夜勤明けも夕方まで日勤といった状況になっています。

学生教育に関しては7年生(研修医1年目)とPGY(研修医2年目、専門医1年目)とが積極的に関与していると思います。また、7年生については病院においては戦力でそういった意味では大学卒業前にすでに仕事をしているような状態と考えることも可能です。他にも輔仁大学の学生は3~4年次の授業は基本的にPBLのみであること、手帳のようなものがあり項目を満たせばハンコをもらえる仕組み(項目をすべて満たさなければ単位をもらえない仕組み)になっているようです。

台湾はかつて7年制でありましたが今は6年制になっています。この変更は国際標準に合わせるためと聞いています。

講義についてはPBLのみで講義がない時期があったことや輔仁大学では講義は後に動画で見ることが出来る点も日本とは違います。

テキストについては中国語のいいテキストがなく、英語版の教科書を読む必要があることがあり、また、日本にある「病気が見える」のよう利便性の良いものがないようです。しかし、そのため日本の学生は英語の勉強をしなくても医学の勉強ができてしまうため、英語の観点からは極めてよくないと思いました。

佐賀大学でも手帳制度、講義の録画については導入していただけるとよいと思います。手帳制度については自身が臨床実習で回った際2~3週間で習得すべき内容があらかじめ理解しきれていない面があり、それを評価あるいは試験で指摘されることがたびたびあることがありあらかじめ習得すべき内容を決めてあるとより理解が深まり、またチェックする体制があることで学生の進捗状況を図ることができるといったメリットもあると思います。講義の録画については現状臨床実習中の講義は先生方の都合に左右されることが多く、実習時期によってミニレクチャーの量に差が見られることがあります。また、ミニレクチャーでは時間の関係か速いペースで進行することが多いのでメモしきれないことがあります。佐賀大学でも主題・インターフェース科目ではネット授業があること、医学部においてもOSCEの動画はネット上にあげていること、大学院の講義ではDVDがあることより可能であると思われます。録画にすることにより、実習時期による差がでないこと、事前に学習ができるため担当患者さんに生かしやすいこと、先生方が同じ講義を何度もしなくてよくなることがあげられます。また、これにより空いた時間を手技の見学・シミュレーションなどの実習に充てて頂けるとさらにありがたいです。何らかの理由で不可能な場合でも、せめて臨床実習のミニレクチャーで使用されるスライドを印刷させていただけるとありがたいです。

⑥ 最後に

今回の台湾臨床実習に際してお世話して下さった佐賀大学の小田先生、福森先生、青木先生、木本先生、また台湾での実習でお世話をして下さった輔仁大学の先生 **Dr. Pei**, **Dr. Lee**、臨床実習でお世話になった病院の先生方、佐賀大学および医学部同窓会・医学部後援会のご支援のより実習に行くことができました。自身の学力・英語能力的な未熟さがある中でこのような貴重な体験をさせていただきありがとうございました。この経験を今後に活かしていきたいと思います。

学習成果に関するレポート ～台湾での実習を終えて～

学習成果の報告に先立ちまして、この度海外研修に関する各種の手続き及び奨学金の給付をしていただいたことに心より御礼申し上げます。皆様の御尽力のおかげで大変有意義な留学を経験することができましたので下記の通り報告させていただきます。

今回のプログラムは3週間台湾の病院にて実習をさせていただくというものでした。各病院1週間ずつ、計3種類の病院に受け入れていただき、私は小児科、総合内科、胸部外科を選択させていただきました。

1つ目の **Shin Kong International HealthCare Center** では小児科をまわらせていただきました。小児科の外来には多くの患儿が殺到し、忙しい日々であることは容易に感じることはできましたが、その中でも私たち日本人学生に懇切丁寧に指導をしてくださいました。もちろん外来だけでなく、NICUも含めた病棟管理をこなしつつ、地域の幼稚園に出向き、健康診断などもこなされていました。実際に私たちも幼稚園に連れて行ってもらいましたが、驚いたことにそこには日本人の子供もたくさんいて、台湾語と日本語が混在した状況でみんな遊んでいました。言語の壁がありつつもみんな仲良く遊んでいる様子は微笑ましく、私たちも日本人学生として子供たちと話をしたり、検査の説明を日本語で行うなどして手助けをすることができました。国が違えど子供たちの健康を管理することのやりがいを改めて感じました。また幼稚園だけでなく、産後の母親、赤ちゃんのための施設 (**Post Partum Center**) にも見学に行くことができました。台湾では母体、新生児ともに産後のケアが重要視されており、産後約1ヵ月間、母親と赤ちゃんが産後のケアのために滞在できるという日本ではあまり見ない施設を見学させていただきました。

2週目は **Cardinal Tien Hospital** という病院の総合内科にて実習をさせていただきました。この科においては台湾の実習生も3人実習していたため、先生は台湾の学生と私たち日本人の学生を組み合わせたチームを作ってください、チーム毎に患者さんを割り当ててくださいました。そのおかげで日本人である私たちも台湾の学生を通して患者さんの問診、身体診察をすることができましたし、台湾の学生と鑑別診断や治療方針について討論することができました。また、その患者さんを朝のカンファレンスで発表させていただく機会を与えてくださいました。英語を使ったプレゼンは初めてのことであったため、非常に貴重な体験となりました。台湾の学生向けのレクチャーに私たちもよく招いていただき、英語で行ってくださったので、私たち日本人にも理解できるものでした。さらに病院の10階にはOSCE練習用の部屋が数多くあり、緊急性のない疾患の患者さんで、なおかつ学生の教育に協力的な患者さんがその部屋にやってきて問診や身体診察などファーストタッチを学生にさせてくれるようです。その部屋は別室から上級医が観察できる仕組みになっており、患者さんも安心して診察を受けることができます。学生はより実践的な環境に身を置くことができ、緊張感をもって実習に取り組んでいる様子でした。さらにその後の上級医によるフィードバックをもとに自己学習に励んでおり、非常に良い教育システムであると感じました。



チームで患者さんのことを討論している様子



OSCE 練習室での学生による診察



診察のフィードバックを先生に受けている様子

最終週は Cathay General Hospital にて胸部外科を選択して実習しました。分院である Sijhih Cathay General Hospital という病院でも手術があったため、先生方が行き来されるのに付き添わせていただき手術を見学しました。心臓外科が別に存在しているので、この胸部外科では主に肺の疾患、縦隔の疾患を取り扱っていました。私が滞在していた週には、肺がん、縦隔腫瘍、気胸など様々な疾患の手術があり、幅広く見学をすることができました。VATS（ビデオ補助胸腔鏡手術）による手術を多く見学したのですが、そのうちのほとんどが **Single port**（通常3つの孔を胸腔に開けるところを1つの孔しか開けずに行う形式）という難易度の高い形式をとり、その上で短時間かつ少ない出血量で手術が終わっていました。高度な技術であると私は感じていましたが、先生方によると「日本の技術のほうが素晴らしく、私たちは日本に学びに行くし、日本から教えに来てもらうこともある」ということをおっしゃっていて、日本の技術を誇らしく思うと同時に、日本の医療技術に関してもさらなる理解が必要であると痛感しました。

また、最終週には交換留学の相手校である 輔仁大学のキャンパスを見学してきました。医学部以外にも50を超える学部が一つのエリアに集約されており、非常に大きなキャンパスでした。PBL室、図書館、講義室を見学し、勉学に励む学生たちから刺激をもらいました。大学の横には新しく建設された大学病

院があり、来年台湾に留学する学生はその病院で実習をすることができるかもしれません。



輔仁 大学講義室にて解剖の講義



新しく建設された 輔仁 大学病院（夏から始動）

3週間を通して最も強く感じたことは、台湾の学生や医師との英語力の差でした。彼らは医学部にはいった時点からアメリカの学生が使う教科書と同じものを使って勉強するようです。初めのうちは教科書を読むのにも時間がかかり大変苦勞するようですが、それを乗り越えて病棟実習に臨むため、実習が始まる時点ではほとんどの医学英語をマスターしています。カルテもすべて英語ですし、英語への抵抗感がほとんど感じられませんでした。国際的な場面では必ずその英語力は重宝しますし、より効率的に文献を利用することも可能でしょう。医師としてキャリアを形成していく上で英語力は必要不可欠なものであることは明確ではありますが、日本の医学教育はほとんどが日本語で行われ、英語力向上という面では諸外国に遅れをとっていることを今回の留学で痛感させられました。この経験をもとに私はこれからも英語力の向上に力を注ぐつもりですし、後輩たちにも学生のうちから英語力を身につけることの重要性を伝えていきたいと考えています。また、このプログラムで学ぶことは英語や病院での専門的な知識ではありません。台湾の人と寝食を共にし、異国の文化に触れることができるというのも大きな魅力の一つでしょう。このプログラムの存在を多くの学生が知り、これを一つの目標にして学習に取り組んでもらえれば、さらにこのプログラムの存在意義が増し、より質の高い国際交流に発展していくのではないかと考えています。来年のチャレンジャー達に期待です。

台湾臨床実習報告書

<はじめに>

私がこのプログラムに応募した理由は、英語を勉強する契機とするためです。以前に台湾を旅行し、台湾はかつて日本の植民地だったからか、日本の文化が多く流入していることや、日本語が話せる台湾人が多くいることを知っていました。初めて留学するには、台湾はとっつきやすい国でした。私はこの実習に参加できることが決定してから、英語学習を本格的に始めた（オンライン英会話 3 か月と医療英語 1 か月）ので、英語力が十分とは言えない状態での出発でした。

<研修病院>

1 週目 (5/8~5/12) : Shin Kong Wu Ho-Su Memorial Hospital

2 週目 (5/15~5/19) : Cardinal Tien Hospital

3 週目 (5/22~5/26) : Cathay General Hospital

<1 週目>

小児科と循環器内科どちらかを選択し、1 週間実習します。私は小児科選択でした。毎朝 7 時半から勉強会があり、そのまま回診に参加します。回診の前には、回診する患者さんについての説明を一通り英語でしてくださり、回診中も喘息の子供の聴診をさせていただきました。入院患者は喘息の急性増悪やマイコプラズマ肺炎、不明熱など common disease が中心でした。実習中は、幼稚園検診や NICU、障害児を保護する協会、病院の VIP ルーム、病院内外の Nursery room、台湾大学病院（症例検討会を見学しました）と様々な所に連れて行ってもらいました。

私たちが行った幼稚園は日本人の幼児も通っており、日本の歌を一緒に歌ったり、日本人の幼児の検診を手伝ったりしました。検診では、内科診察、斜視検査、視力検査、聴力検査を行い、内科診察では生理的狭窄音の聴診や、診察のポイントを教えていただきました。

小児 ICU は NICU と PICU 合わせて 30 床で、状態が良くなった児は ICU 内の観察室に移されます。ここでは、新生児診察の仕方を教えてもらったり、脳エコーを見学したりしました。台湾では出産後 1 か月は母親の休息期間とする慣習があり、その間は母親の代わりに Nursery room という所で赤ちゃんの世話をします。病院外の Nursery room には母親が泊まる部屋も用意されており、モニターで赤ちゃんの様子を逐一確認できます。宿泊費はかなり高額でした（1 泊 6000 台湾ドル）。

私は神経分野に興味があったので、障害児のお世話をしている協会は非常に印象に残っています。この協会には頸髄麻痺、水頭症、ダウン症、WAGR 症候群などの脳神経疾患をもつ子供たちが様々な事情で預けられており、劉先生はここに週一回通っているとのこと

した。子供たちは劉先生が来ると嬉しそうにしており、親密なコミュニケーションが取れていると感じました。運動スペースや多目的ホールもあり、清潔で心地よい室内で優しいシスター達が世話をしており、子供たちはとても幸せそうに見えました。

OPC(Out Patient Clinic：外来)も見学しました。患者はひっきりなしで外来は朝から始めても夕方まで続きます。診察は中国語で話しているのが全くわかりませんが、先生は余裕が出来る私たちに英語で患者について説明してくださいました。また、VIP 外来での発達検診も見学しました。

この一週間は色々な経験ができて実り多い実習でした。先生方は教育熱心で、どこで見学しても患者についてフィードバックしてくださいました。分からない英単語があっても紙に書いてくださり、平易な英語に言い換えて説明してくれました。

<2 週目>

神経内科と一般内科のどちらかを選択し、1 週間実習します。私は神経内科選択でした。この実習を通じて、脳梗塞の診断が出来るようになることを到達目標として、事前に NIHSS、神経診察、画像所見についての動画を観るよう宿題が出されます。葉先生がこの 1 週間私の面倒を見てくださり、脳梗塞 (2 名)、ALS、糖尿病性ミオパチーの患者の診察を行いました。学生は 1 人だったので、マンツーマン指導をしていただく貴重な 1 週間となりました。

葉先生による脳梗塞についてのレクチャーがあり、一般内科の学生や研修医 (PGY: Post Graduate Year) と一緒に受講しました。PGY がある脳梗塞の症例についてプレゼンし、それを元に Onset time や画像所見について先生と話し合います。印象的だったのは、患者さんを討論室に呼び入れて、皆の目の前で先生が診察してくれたことです。日本ではありえないことだと思います。診察での中国語はインターンの学生が英語に翻訳してくれました。ここでは、頸動脈雑音を実際に聴診させていただきました。

合同レクチャーの他にも、画像所見 (early CT sign, DWI) や TOAST 分類、NIHSS 診察の仕方について教えてもらいました。与えられた 2 名の脳梗塞患者についてのプレゼンや画像所見を述べるように求められたりして、拙い英語力の私は苦戦しました。上手く出来なくても、宿題として次の日に確認してくださり、本当に有難かったです。

実習中に典型的な症状の ALS の患者が入院し、朝カンファで discussion をしたり、先生と一緒に診察をしたり、筋電図検査を見学したり、葉先生にプレゼンしたりしました。初めて Fasciculation を見られたり、典型的な ALS 患者の入院時診察に立ち会えたり、非常に貴重な経験が出来ました。この後、糖尿病性ミオパチーの患者の診察を見せていただき、運動神経疾患の鑑別について教えていただきました。

他にも、回診や外来、アルツハイマー病の治験の見学をしたり、救急科と合同の脳梗塞カンファに参加したり、最終日には葉先生に系列病院に連れて行ってもらいました。この実習での熱心な指導のおかげで、神経診察と脳梗塞の診断の仕方を習得できました。

<3週目>

心臓血管外科と胸部外科のどちらかを選択し、1週間実習を行います。私は心臓血管外科選択でした。Cathay hospital は台北中心市内の他に寮の近くに汐止分院があり、実習は両院の手術を見学する形でした。CABG(心臓血管バイパス術)2件, MVR(僧帽弁修復術)1件, PTA(経皮的血管形成術)1件を見学しました。手術がない日は、次の手術の予習のみで後はフリーだったので、台北市内を観光しました。日本ではCABGはon beatで行いますが、この病院では心肺循環を用いたoff beatで行います。そのため、手術時間は4時間程と日本と比べかなり短くスピーディーでした。以前は日本で数か月間研修を行う先生も多かったそう(現在はアメリカが主流、心外分野のトップ5病院も全てアメリカ)で、日本のCABGの成績はとても良いと言っていました。ICUに日本人の先生がいらっしやっただので、見学する手術の患者説明は日本語でもらえました。手術中にも先生方が説明を適宜入れてくださったり、質問がないか聞いてくださったりしました。この1週間は自由な時間も多く、手術も観光もともに満喫できました。

<その他>

3週間の実習を通して、いかに日本人が語学の勉強不足かを痛感しました。台湾には中国語の良い教科書が少なく、医学の勉強は全て英語で行います。カルテやプレゼン資料も英語でした。病院内では多くの医師が留学経験を持っており、英語が流暢に話せるのはもちろん、日本語が話せる人もいました。ある先生は、「日本人は英語が話せないので、日本の高度な医療を勉強するには日本語を勉強するしかない」と言っていました。このように、英語に常に触れることができる環境は羨ましい一方、日本の隣国では英語が当たり前で話せるという現実を恥ずべきだと思いました。また、台湾の方々は私たち留学生にとっても親切で、積極的に話しかけてくれ、事あるごとに助けられました。日本に来る台湾の学生さんや病院で出会った研修医や先生方には、毎日のようにご飯に連れて行ってもらって、本当に楽しい3週間でした。休日は台湾のライブハウスや、九份、クイーンズ・ヘッドに行ったり、温泉に入ったりして台湾を満喫しました。

<おわりに>

私は十分な英語力はありませんでしたが、この実習に参加して本当に良かったと思っています。この実習を通じて基礎的な医療英語を習得でき、医療文献を読むことに対する抵抗はなくなりました。同時に、英語力が十分でなかった分、深いコミュニケーションが取れず悔しい思いもありました。1か月後には台湾の学生が日本に来るので、それに向けて更なる英語学習を続けていきたいと思います。英語力に自信がなく応募を諦めているなら、思い切って応募してみることを強く勧めます。最後に、留学に際し、お世話をしてくださった先生方、並びに佐賀大学・医学部後援会・医学部同窓会の皆様に厚く御礼を申し上げます。